〔書評・紹介〕

宮地敦子著『身心語彙の史的研究』

浅見徹

近年に類を見ないくらい、楽しい書である。

内容の一端を紹介しよう。

序章

三ページ。全文を引用してもよい程の量だが、この中に、この書の構成と目的が手ぎわよく提示されている。すなわち、第一部ではおもな身体語彙と空間語彙をあつかい、第二部ではいくつかの心情語彙と感性語彙をあつかう、と全体的な構成をまず大きく規定する。そして、身体語彙は自己認識の基本と考えられること、さらに人間は、自分のからだ・位置・視点などを基準にして空間を把握し、ある時はそれを言葉としたと考えられるので、空間認識の基本、ひいては時間そのほかの抽象概念まで拡張されるこれらの身体・空間語彙を考察の対象としたという趣旨が述べられる。次に、これらの語彙が表象する事物・概念に対する考察だけではなく、文脈的機能・文体的特性などの面から考察を進めるという方針が示される。続いて、第一部としては、まずは頭部、次には頭身の分離の表現、さらに心身の分離から遺体に関する語彙、心臓と精神活動の座に関する語彙、というように有機的連関を伴って展開し、後半に入って、前後・内外・表裏・上下・高低・高深・深浅と空間へ連なり、対の意識に及ぶ、というこの書の構造が詳しく説かれる。この構造は当然第二部にも引き継がれ、愛憎・好嫌に関する語彙をめぐる問題から、愛にかかわる語、愛から美へと変貌した語の系譜、美的対象として定着した「雪月花」をめぐる諸問題が、外国文化との接触、日本語内部での位相・文法・音韻・表記・意識などとからみ合って変貌してゆくさまを追求するという意図が示されている。そして、各章の表題として、語彙の史的研究に対する筆者の視点を明示し、採り上げた語彙を副題として添えるという体裁にも言及している。

第一部

第一章　基礎語の交替――「かしら」「かうべ」「あたま」ほか――

一、はじめに　〔頭〕をあらわす語彙の消長をとりあげる。身体語彙とは、主として人体部位に関する語彙をさす。人間のからだと動物のからだを区別する必要のある場合があるから、人体語彙ではなく身体語彙と称する。

二、現代日本語における〔頭〕をあらわす語彙　これには、アタマ・オツム・クビ・トウブがあるが、アタマが代表語形である。～ヲ出ス、～ガ大キイ、～ヲ刈ル、～ガ良イ、～ゴナシなどの形で使われるか否か、長イなどの形容詞と関わった時どうなるか、文体的な

偏りはないか、転義的用法をもつか、頭髪・頭脳の機能をあらわすか、尊敬・普通・卑罵の文体で使用可能か、複合語の構成要素となるか、比喩用法をもつか、頻度数は如何、などの検討の結果である。

三、「かうべ」と「かしら」　カシラは奈良時代から、カウベは平安時代から用例が見える。カウベは、女流仮名文で使われず、頭髪や頭脳を表わさず、複合語を作らず、比喩あるいは抽象的用法に転ずることもなく、室町期には特定の意味用法に固定しかけて、江戸期以後は擬古文や慣用句の中でのみ使われる。カシラは位相的・文体的な偏りもなく、頻度も高く、用法も広いので、このカシラを〔頭〕を表わす語彙の古代語の代表語形と認める。

四、「あたま」の意味変化　アタマは平安初期に針灸点として前頭部の中心をさす語として用いられたが、室町後期、江戸初期に、頭頂部、そして頭全体を表わすようになった。

五、〔頭〕をあらわす語彙の消長に関するまとめ　〔頭〕をあらわす語彙は、カブ・カシラ・カウベ・アタマの順に消長した。その周辺に、クシ・カミ・ツブリ・ツムリ・ナヅキ・ヅ・クビ・シルシ等があった。これらの多くは、形状からの命名、他の部位や道具衣服などからの転用による婉曲表現、漢語の借用などの方法で供給されている。

六、身体語彙の史的構造についての二、三の問題　身体語彙のうち、他の部位をあらわす語にもかなりの消長交替があるとはいえ、その基礎的な語としては〔頭〕だけに顕著な交替が見られる。この語が表現価値にかかわるものだからであろう。同じ部位をさす語が二語以上併存する時は使用価値が異り、代表語が存在する。身体語の意味変化は、部分または内部から拡大されることが多く、逆は見つけにくい。身体語は、もと人間・動物共用であったものが、人体語としてはすたれ、非人体語として残存することがある。近代以降は新語を補充する場合に、漢語外来語から供給することが多い。

補説、「なづき」について　脳や骨髄をあらわしたナヅキは上代から存在するが、特殊な場面に偏って用いられる。中世、頭頂から頭をあらわすようになり、江戸期に自由な用法を獲得する。現代方言でも、頭・額・脳天の意で使用するところがある。

第二章　対比語の意味変化――「くび」と「むくろ」ほか――

一、頭身分離・心身分離の表現の種々相　〔頭部〕とそれを支える〔胴体・肢体〕、〔心魂〕とその器である〔形体・死体〕を対立分離させての表現があり、〔頭部〕をあらわすいくつかの語のそれぞれに、〔胴〕をあらわす数種の語が対応して用いられる。〔胴体〕〔形体〕に共通して使われる語もある。それらの語彙の意味・用法の変化を考える。

二、「くび」の意味の変化　クビは第一義的には頸部をさし、この意味で上代から現代まで使われている。それが後に隣接部位としての頭部・切り離された頭部をさすようにもなった。今昔から軍記物語以降である。

三、「むくろ」の意味の変化　ムクロは書紀以下の訓読資料、戦記物語、読本などに群をなしてみえるが、「軀幹」に近い意で、狭くは「胴体」をさして手足の有無にはこだわらないが、頭部とは区別されている。また、生死に関らず用いられていたが、戦記物語では、クビと対比的に、斬首後のからだについていう例が多い。戦記物では〔死体〕の意で、死骸、死カバネ、カバネ、ムナシキカラダ、ムナシキ姿等が首の有無に関らず用いられるが、ムクロは首を取られた後にのみ使う。これは近世まで受け継がれる。一方、近世前期

には、ココロなどと対比的に、死骸とほぼ同義にも用いられるようになる。ミガラも同様の変化をたどり、カラダはほぼ逆の経過を経る。

以下、本書末尾に掲げられた細目次で内容の紹介に替えよう。

第三章　類義語の消長――「かばね」「しかばね」「から」「なきがら」ほか――

一、はじめに

二、「かばね」から「死骸」「死体」「遺体」へ

三、「しかばね」の成立

四・一、「から」と「むなしき―から」

四・二、「からだ」と「むなしき―からだ」

五、「なきがら」の成立

六、まとめ

第四章　漢語の定着――「こころ」「心の臓」「心臓」ほか――

一、はじめに

二、「こころ」から「心の臓（シンのザウ）」「心臓（シンザウ）」へ

三・一、五臓の一としての心臓

三・二、内臓の一としての心臓

四、まとめ

補説　精神活動の座としての「脳」について

第五章　対義語の消長――「まへしりへ」「うちと」「うへした」ほか――

一、はじめに

二、「まへ」と「しりへ」「うしろ」

三、「うち」と「と」「そと」

四・一、「うへ」と「した」「うら」　付、「おもて」

四・二、複合名詞の成立順序

五、まとめ

第六章　対義語の条件――「たかし」とその類縁の語――

一、はじめに

二、「高し」の意味・用法

三、「高し」と「ひきなり」「ひきし」　付、「みじかし」「いやし」

四、「高し」と「深し」・「闌く」と「更く」

五、まとめ

第七章　対義語の周辺――「ふかし」とその類縁の語――

一、はじめに

二、「深し」の意味・用法

三、「深し」と「浅し」

四・一、「山高し」「谷深し」ほか

四・二、「雪高し」「雪深し」

五、まとめ

六、対義語の位置

第二部

第一章　漢文・欧文との交渉――「愛す」の系譜――

一、はじめに

二、漢文との交渉

二・一、今昔物語における用法　付、「愛欲」「愛執」

二・二、沙石集・太平記などにおける用法

二・三、五常訓における用法

三、欧文との交渉

三・一、聖書の和訳　付、「かはいがる」「いつくしむ」

三・二、花柳春話・世路日記などにおける用法　付、

「愛恋す」「ラブする」
三・三、浮雲以後の用法　付、「したふ」「ほれる」
四、まとめ
第二章　対義語と類義語――「にくむ」とその類縁の語――
一、はじめに
二、「にくむ」と対義的関係にある語　「おもふ」「愛す」
「いとほしがる」など。
三、「にくむ」と類義的関係にある語　「いとふ」「うとむ」
「そねむ」など。
四、まとめ
補説「いとふ」について
第三章　対義語の成立――「すく」「きらふ」ほか――
一、はじめに
二、「きらふ」の意味・用法の変化
〔A〕仏の道にきらはれし人
〔B〕わらはをきらうてどれへ行くぞ
三、「すく」の意味・用法の変化
〔A〕すける物思ひ
〔B〕馬にすいた者
〔C〕立花をすける人
四、情意動詞「きらふ」「すく」の対義関係成立
五、まとめ
補説「数奇」について
第四章　類義語の交錯――「いとほし」「かはゆし」ほか――
一、愛にかかわる形容詞の消長
二・一、「いとほし」の意味・用法の変化
〔A〕せむかたなくいとほしきわざ
〔B〕さりがたき妻いとほしき子
二・二、「いとほし」の音韻変化とそれにともなう漢字表記の変化
三・一、「かはゆし」の意味・用法の変化
〔A〕死する時の目はおそろしくかはゆし
〔B〕かはゆいはにくいの裏
三・二、「かはゆし」の音韻変化とそれにともなう漢字表記の変化
四、近世以降の「いとしい」「かはいい」の比較
五、まとめ
第五章　情意語の意味変化――「うつくし」の系譜――
一、はじめに
二、「うつくし」の意味・用法の変化
〔A〕うつくし母にまた言問はむ
〔B〕小さくうつくしきさま
〔C〕うつくしかりし花のいろいろ
〔D〕うつくしくめでたき御すくせ
三、美にかかわる形容詞の消長
第六章　鼎立意識成立の背景――「雪月花」の受容――
一、はじめに
二、四季の景物「花ほととぎす月ゆき」
三、花と雪と月の取合せ
四、「四季の雪」にみる雪の優先

五、「雪月花威勢あらそひ」にみる鼎立意識
六、まとめ
補説「月白し」について
第七章　並列名詞の構成順序――「つきゆきはな」の成立――
一、はじめに
二、「琴詩酒」と「雪月花」
三、「ゆきつきはな」から「つきゆきはな」へ
四、まとめ
五、並列名詞構成順序の変化
余　章　国語史における時代区分
一、作業仮説としての時代区分
二、諸説の解釈と整理
三、語彙の史的研究と時代区分との関係

後記によれば、この書は、十三年半の間に発表された論文を集めたものだが、二つあるいは三つの論文が一つの章として編まれたものも、二三にとどまらない。その結果が、右に紹介してきたような、実に整然とした構造として、読者の前に提出されているのである。当然、著者の意図・方法・材料・結論、すべてにわたって、一読非常に明快であることが、この書の構造自体から既に予想されるであろう。

事実、各章とも「はじめに」と「まとめ」の項があって、その章の目的と問題が提起され、結果は確実にしめくくられている。その内部も、論理は明快であり、文章は洗練され、挙例は的確である。この種の論考としては、文献上の実例がもう少し多く挙げられるのがふつうかと思われるくらい、用例は簡明である。しかし、これらの例は、位相や文脈その他の諸条件に照らしての必要最小限が精選されたものと容易に推察しうる。その背後にどれだけの博捜があったものか、何気なく提出されている挙例の、その出典の豊富さからでも、私などには気の遠くなるような思いがするのである。

一方、たとえば「うつくし」という語の意味を上代中古に探るとなれば（第二部第五章）、これは、既に多くの述作もあり、それらを通じて、使える文献の例はことごとく限られたものであり、同じものでしかあり得ない。むろん、書き留められるという現象がごく特殊なケースであり、その文献として残された実例というものは、ある時ある個人の一回の発話を基にしたものである。それを以って、ある時代のある区域、ある階層の人々のラングと見なすためには、何ほどの拡張解釈を行わなければならないのは当然である。

あめつしのいづれの神を祈らばか
うつくし母にまた言問はむ

万葉集防人歌中のこの例を、先学たちは、子から親に対して「うつくし」の使われた例と解釈してきた。この解釈を支える基盤として、他に、夫婦・恋人・子・孫に対してこの語が用いられた事実が存在したのである。従って、これらを総合して、「うつくし」は親しい肉親に対して用いられるとまとめられることが多かった。そこでは、父親に対して使用した例のないことを、見落したか、あるいは古代文献の遺存の状態からくる常としての偶然的欠落と見なしたか、のいずれかの事情が考えられる。この著者は、逆に、父親に対して用いられた例のないことから、この防人歌の例を、男盛りの防人が子供同然の老母に対して用いた特殊な例と解釈して、「うつくし」を目下と意識した場合にのみ使われた語と認定した。

同様に、枕草子の「うつくしきもの」の段

何も何も小さきものはみなうつくし

とある箇所は、これを字面通りに受け取って、中古には形体の小なるものにはすべて「うつくし」と言いえたと解釈できる。そして、その方向は現代人の感覚からはあながちに否定できないので、従来、さして問題にもなっていなかったのである。しかし、この時代の他の文献では、「うつくし」は人や人のさまに対してしか用いられていなかったし、時代がやや下っても、その物の持ち主などが直ちに連想される物の様子についてごく稀に用いられるに過ぎない、という状態にあることを、著者は確認している。そこから、枕草子が雛の調度・蓮の浮き葉・葵から雁の卵・瑠璃の壺までを列挙したことを、枕草子――清少納言の特殊性として、そこに文学なり美意識なりにおける一つの新しい感覚・価値を見出そうとするのである。

たまたま書き留められ、たまたま我々の手にまで残された文献上の数少ない用例の処理がいかに大切なものか、個々の一つ一つの姿ではなく、全体の流れを見通した上での把握がなされなければならないこと、ふと抱く先入観念による拡大解釈の恐ろしさなどを、それとなく、きわめて淡白に、しかし重く大きく教えてくれる好論と言わなければならない。ここでは、そのごく一端を採り上げたに過ぎないが、全篇、珠玉に満ち満ちている。じっくり読みこんでも、斜めに目を走らせるだけでも、それぞれに得るところの多い、楽しい書である。

一方、些少の不満がないわけではない。例えば、余章。

ある問題を史的に扱おうとした時、時代区分が出発点であり、結論であるのは常識であろう。時間的・量的に連続する現象を、ある時を境にして、異質のものと把握・分類することだから。そして、いわばそのことによって歴史が成立するといえるのである。ある現象、例えば語の用法の時代的な変化を見た時、不変・連続の面が前提となることも当然であろう。その本質的不変の上に立って、種々の変の現象のうち、いずれが――例えば、位相の問題とか、意味の差のどの部分が等――質的な優先順位となるかを判定しなければなるまい。それによって、ある語の通時的変貌の上に時代区分が可能になる。それは、他の語の歴史とは食い違う場合もあること、また当然である。従って、次にはいずれの語の場合が語彙史の時代区分にとって重要かという問題になろう。そして、語彙史の時代区分と文法史の時代区分が一致するとも限らず、それが国語史を形成するためには、あるいは文化史なり何なり、より包括的な歴史の時代区分のためには、さらなる検討が必要となる。その中にあって、語彙を対象とする研究が、特にその史的検討の面においては、これを「余章」として扱わざるをえないという現況にあること、それはそれとして十分理解できる。というより、身に泌みて感じるところである。とはいえ、語彙の史的研究と銘打ってこれだけの書を成しえたからには、歴史学や文法史の方からする時代区分の細目についての検討はさて置いて、この書で扱った実例からする時代区分の、せめては見通しと方法について、もう少し確たるものを示していただきたかった。むろん、それが絶無というのではないけれども、他の章に比して歯切れが悪いと感じるのは、読み取り方の浅さだろうか。そして、全篇の時代をさす用語も、それに基いて統一していただいた方が、より視点が明確になったのではなかろうか。

（昭和五十四年十一月二十日発行　明治書院刊　A5版　三七二頁　四八〇〇円）

――岐阜大学教授――